高大接続カリキュラムの開発過程
－高校側の視点から－

助　川　晃　洋　・　坂　本　徳　雄

Ⅰ．課題

近年の我が国教育界では、高大接続改革をどう進めるかが、中心課題の一つになっている。これに関係する中央教育行政レベルの主要文書としては、2013年10月31日に教育再生実行会議の「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第四次提言）」、2014年12月22日に中央教育審議会の「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）」、2016年３月31日に高大接続システム改革会議の「最終報告」がとりまとめられて、公表されている。また文部科学省は、2015年１月16日に「高大接続改革実行プラン」、2017年７月13日に「高大接続改革の実施方針等」（「『高校生のための学びの基礎診断』実施方針」、「大学入学共通テスト実施方針」、「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」の総称）を策定している。

そして2016年12月21日に出された中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（＝中教審答申）では、第２部「各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性」の第１章「各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続」の６「学校段階間の接続」の（５）「高大接続」において、次のように述べられている[1]。

○　現在進められている高大接続改革は、大学入学者選抜の在り方のみが議論されているわけではなく、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の在り方を一体的に改革してい

こうとするものであることに留意が必要である。

○　本答申が示すように、次期学習指導要領に基づく高等学校教育は、生徒一人一人に資質・能力を育むことや、アクティブ・ラーニングの視点で生徒の学びの質を高めていくことなどを目指すものである。大学入学者選抜においても、高等学校教育を通じて育まれた生徒の力を多面的に捉えて評価していくための改革が進められている。こうした中で、大学入学者選抜は、高等学校における学びを価値付け、その成果を大学教育において更に伸ばしていくためのものとして機能することになる。

○　大学教育においては、高等学校教育における成果を更に伸ばすことを目指し、三つの方針（三つのポリシー）[2]を策定することとされている。これにより、生徒や高等学校関係者は、難易度ではなく、どのような力を身に付けていきたいかを軸に、進路を選択していくことが可能となる。

○　高等学校においては、こうした高大接続の見通しを持ちながら、教育課程の編成・実施・改善、指導や評価の充実を図っていくことが求められる。

以上の箇所のポイントは、中教審答申の「概要」では、次のように整理されている[3]。

・　高大接続改革は、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の在り方を一体的に改革するものであり、大学入学者選抜においては、高等学校教育を通じて育まれた生徒の力を多面的に捉えて評価していくこと、大学教育においては、高等学校教育における成果を更に伸ばすことを目指している。高等学校においては、こうした高大接続の見通しを持ちながら、教育課程の編成・実施・改善、指導や評価の充実を図っていくことが求められる。

しかし三位一体の改革を掲げる国・政府側の意向や期待とは裏腹に、その進捗状況には偏りが生じているようである。（筆者が入手し得た限りで）直近のレビュー論文を見ると、「高大教育接続問題は、もっぱら大学教育の文脈で議論されており、高校教育

の実践に焦点化した議論が少ない」[4]と述べられている。この指摘については、さすがに「もっぱら」というのはやや言い過ぎだとしても、関連文献を渉猟して得た筆者の印象や実感とほぼ合致しており、大筋で賛成することができる。ただ仮にその通りだとしても、「少ない」のは、あくまでも「高校教育の実践に焦点化した議論」の量であって、当該「実践」の数ではないだろう。むしろ生徒の主体性を喚起し、進路・目的意識を高め、大学に行くべき必然性を自覚させ、進学後の学業適応につなげようとする高校側の優れた取り組みは、例えば入学前教育、リメディアル教育、初年次教育など、高校からの移行を支援する大学側の取り組み以上に、実は積極的に行われているのではないか。問題は、それについての情報公開・発信が進んでおらず、参照に値する有益な事例報告が不足しているために、関係者の間で実践的知見が共有されていないということではないか。このように考えて本稿では、一つのモデルケースとして、宝仙学園高等学校の取り組みに着目する。同校は、東京都中野区に所在する併設型（外部混合あり）私立中高一貫校の高等部で、女子部と共学部理数インター[5]の２部門を持っている。このうち女子部は、２コース制を導入しており、“アドバンスト”保育コースと“アクティブ”進学コースに分かれている。そして本稿の課題は、2017年度の宝仙学園高等学校女子部における高大接続カリキュラムの開発過程を追跡することである（共学部理数インターについては、考察の埒外とする）。より具体的には、保育コースとこども教育宝仙大学、進学コースと大正大学の両方のパートナーシップについて、それぞれ独立した章を設けた上で、順番に論じていく。

なお執筆分担であるが、ⅠとⅣ（に加えて全体の調整と仕上げ）は助川、ⅡとⅢは坂本による。坂本は、2015年４月以来、宝仙学園高等学校副校長を務めており（本誌刊行時現在に至る）、校内事情や改革構想に精通している。そして坂本の論述は、関係する会議の議事録（罫線で囲んだ部分は、そこからの一部抜粋である）や自身のメモなど、部外者には決して入手することができない（しかし公開の許可を得ている）情報に依拠している。

Ⅱ．保育コースとこども教育宝仙大学の場合

１．保育コースからこども教育宝仙大学への内部進学者に対しては、2016年度までに、受験料・入学金半額免除や特待生選考試験（入学金全額免除）、AO入試と特別推薦入試での小論文削除、事前指導の実施などの優遇措置を講じてきた。しかし近年、保育コースからの進学者は、卒業生の30％を超えない状況にある。さらに高校２、３年生向けに、それぞれ「保育概論」、「幼児教育論」を開講したものの、担当講師（幼稚園長経験者）が１～２年で退職してしまうため、授業の質を保つことができなかった。そこで保育コースでは、求める生徒像を明確化するとともに、「７ヶ年保育者育成プラン」を策定することが必要であると考え、2017年６月に、保育コースとこども教育宝仙大学との高大接続企画会議を立ち上げた。設立当初の時点で、２学期中に課題を整理し、３学期には翌年度の事業について検討するとともに、できるところから始めることを確認した。

２．10月25日の会議では、次の六点についての議論が行われた。

① 高校３年「幼児教育論」の実施状況
- ５／16　ダンス
- ６／13　リトミック
- ７／４　心理学

② 高校３年対象大学説明会
- ６／14　実施

③ 高校３年内部進学者に対する優遇制度
- AOH入試（宝仙学園女子部生徒優遇）を実施する。
- 受験料・入学金半額免除や特待生選考試験（入学金全額免除）は従来通りとする。

④ 高校２年対象「保育概論」の実施状況
- ２／６　赤ちゃんを知ろう

⑤ 高校１・２年対象大学説明会
- 11／６　16：00～17:00　大学３号館３Ｆ332教室

⑥ 保育系授業は、専門の非常勤講師が担当している。１～

２年で退職する状況にあり、継続性に課題がある。大学教員は、協力するが担当しない。

そこでは次のような意見が出された。

○　保育系授業は、保育者にはどのような資質・能力が求められるのか、それをどのように育てるのか、保育者像を明確にした上で、高校３年間を見通した全体計画と年間指導計画に基づくものでなければならない。

○　非常勤講師や大学教員に頼る保育系授業が10年以上にわたって継続されてきた影響を受け、専門職的保育系のリーダー的教員（保育主任）が養成されていないという意味でも改善が求められる。

○　現在の内部進学者優遇制度は、経済的負担軽減策である。受験負担軽減策を導入しても、現状では、内部進学者の増加に結びついていない。抜本的対策が必要である。

３．11月10日の会議では、次の四点についての議論が行われた。

①　大学授業への高校生の参加をどのように行うか。

②　保育概論と幼児教育論の授業をどのように行うか。

・　大学教員がゲストティーチャーとして行う。

③　生徒と保護者のニーズに合った大学説明会をどう展開するか。

・　11／６の大学説明会での生徒アンケートの結果を踏まえた戦略を考える。

④　高大接続の本質を双方がどうとらえるか。

・　７ヶ年教育の必要性を共有する。

そこでは次のような意見が出された。

○　高校生のときにこそ、知育玩具、保育英語、調理、ピアノなどで、大学生と一緒に学べる企画が欲しい。そのことを通して、生徒・学生相互の交流を深める必要がある。

○　高大接続のよさは、保育者になるために、すべての生徒が

最後まで面倒を見てもらえるという特別感や安心感、信頼感を深めることにある。大学のゼミ体験を通して、高校での学びと大学での学修の違いを知るとともに、就職という出口の保証が十分にあることを知らせる機会である。例えばピアノでバイエル106番まで達成している生徒が、上級者コースに進める優遇策があると、よい目標になる。

○　女子部ダンス部と大学ダンス部の交流を増やしていきたい。卒業時には、保育士と幼稚園教諭、キッズダンス指導者の資格を同時に取得することができるというコースがあるとよい。

４．12月13日の会議では、「課題　大学授業への高校生の参加をどのように行うか」についての議論が行われた。

こども教育宝仙大学			女子部保育コース（火曜日）	
１限	８：50～10：20	←	１限	８：40～９：30 ３年・幼児教育論
		↖	２限	９：40～10：30 同上
２限	10：30～12：00	←	３限	10：40～11：30 ２年・保育概論
			昼休み	11：30～12：30
３限	13：00～14：30		４限	12：30～13：20
			５限	13：30～14：20
４限	14：40～16：10		６限	14：30～15：20
			終礼	15：20～15：30
５限	16：20～17：50			

３年・幼児教育論２コマの授業について、大学１限の授業に参加することができるかを協議する。大学側からは、授業参加と単位取得認定は難しいとの事前回答あり。

そこでは次のような意見が出された。

○　３年・幼児教育論、２年・保育概論の授業時間に、大学の授業を受けられるようにすべきである。さらに、単位取得認定が可能な制度を立ち上げるべきである。

○　高大接続のための教育目標の設定、生徒像の共有化、育成すべき資質・能力の分析をすべきである。大学の三つの方針であるディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーと高校の教育目標との接続によって育まれる資質・能力について共有すべきである。

○　高校で取り組むことができる具体的なカリキュラムをデザインすべきである。高校３年間の「トータルプラン」と「ステージマップ」との接続を図るべきである。

○　なぜ生徒が受験しないのか、入学した頃は全員こども教育宝仙大学に入学するものと思っているが、上級生になるに従って他大学を志望するようになり、外部に進学している。

５．2018年２月24日に、大学説明会「大学生と語ろう」を開催した。事後の生徒アンケートを分析してみると、「大学生と実際に話してみて、色々なことがわかった」という声が多かった（36／50名）。また生徒の感想文によれば、大学生からは、実技系（手遊び、ピアノ、折り紙、あやとり、絵など）をしっかり学ぶ、子どもたちの目線で考える、保育系の新聞の切り抜きを通して、現在の保育に対する問題意識を高める、といったことの大切さが伝えられた。内部進学のメリットや有利な点、実習体験での学びについてのアドバイスもまた、高校生にとって収穫であったようである。

Ⅲ．進学コースと大正大学の場合

１．宝仙学園高等学校と大正大学は、ともに仏教主義を背景とした学校文化を持っており、建学の精神にも共通性が認められる点を踏まえて、高大接続関係の構築に乗り出した。2017年６月には、進学コースと大正大学との高大接続企画会議を設けている。また進学コースでは、大正大学と連携・共同して取り組む課題として、「多面的・総合的な評価を生かしたキャリアプランニング力とキャリア実現力の創造」、「言語化を通して学びを深める授業の創造」、「主体的・協働的に行動することができる生徒の創造」の三点を設定した。

2．6月2日の会議では、次の四点についての議論が行われた。

① 名称について
- 「大正大学と宝仙学園高等学校との高大接続会議（仮称）」とする。

② 目的について
- 生徒の実態（人とかかわる仕事に就きたい、おもてなしの心や献身的な心を持っている、経済や経営にも関心を持たせたい）、入試改革における「選抜からマッチングへ（偏差値以外の軸を基準とする）」の転換を踏まえ、高大で育みたい資質・能力を「どんな分野でも請われた先で対応することができる力」ととらえたい。

③ 組織及び役割分担について
- それぞれの代表者を決定した。

④ 大正大学での授業体験の方向性について
- 従来の見学型（キャンパス体験、食堂体験）から大学生と一緒に学ぶという参加型への移行を通して、「大学での学びに必要な資質・能力とは何か」を知り、キャリア形成を図ることをねらいとする。具体的には、生徒一人ひとりの専門科目での「体験の言語化」の学び合いを通して、卒業までの行動目標発表という「新たな言語化」へと発展させる。キャリアプランニング力とセルフプロデュース力の育成を図るものとする。

3．6月30日、9月8日、10月13日の会議では、大学授業体験とリフレクション（振り返り）学習をどうするかについての議論が行われ、その流れ（サイクル）が確認された。例えば高校3年生の場合は、次の通りである。

○ キャンパス体験
- 大学教育への円滑な導入を図る（大学訪問、正課科目「地域福祉論Ⅱ」、「現代子ども研究」、「環境応用研究」、「環境の基礎」、「こころの教育を考える」、「異

文化研究の展開Ⅱ」、「宗教史Ⅱ」の授業体験）。

○　リフレクション１

・　授業体験によって得た刺激と影響を生徒自身が認知し、言語化する（キーワード、気づきをシェア）。

・　授業での気づきを言葉にしよう。キャンパス体験、授業体験（～が、～について）から得た感想（高校と大学の違いなど）を言葉にしよう。

○　リフレクション２

・　経験の言語化を通した思考の訓練を行う（エピソード、結論、つながり）。

・　主語を意識して言語化しよう。エピソードを根拠として論理的に伝えているか、チェックリスト（視点が区分されているか、エピソードが示されているか、結論に当たる感想があるか、以上の三つに論理的なつながりがあるか）を使って評価し、全員の発表を振り返ろう。

○　リフレクション３

・　卒業までの高校生活の行動目標を宣言する（新たな言語化）。

・　リフレクション２で発表した「今日の体験から得たこと」に基づいて、卒業までの行動目標を立て、手元の用紙（Ｂ６版）に書こう。グループ代表者に発表してもらおう。

Ⅳ．総括

本稿では、高大間におけるカリキュラム・アーティキュレーションの実現に向けた宝仙学園高等学校女子部の取り組みについて、2017年度だけに時期を限定し、各コースごとに分けて、あえて当事者の目線で論じてきた。その結果、次の二つの事項を確認することができた。

（１）　保育コースでは、こども教育宝仙大学への進学者の確保をめざして、高校生向け保育系授業の実施や大学説明会の新しいあり方、大学授業への高校生の参加について議論を重ねており、生徒が大学生と交流する機会も設け

ている。

（２）　進学コースでは、高校から大学への円滑な移行を実現し、将来的なキャリア形成と自己実現に資するために、生徒が大正大学を訪問し、正規の授業を受け、振り返るという循環的な学びの機会を設けることを計画している。

以上の二点が、総体として結論を成す本稿によって、高大接続改革の実態を事例に即して、高校側の視点から把握するという目的が、部分的に達成されたものと筆者は考える。

しかし本稿では、宝仙学園高等学校女子部の高大接続カリキュラムが仕上がっていくプロセスについて、最後までフォローし切れていないし、その必然的な帰結として、完成版の全体像や特色などもまた、全く提示することができていない。これらについては、稿を改めて述べたい。

そして宝仙学園高等学校女子部では、2018年度より、上述した二つの大学との間で、前年度からの議論を継続しつつ、それと並行して、様々な事業を展開している。保育コースでは、６月27日に、卒業生の先輩を囲む会「先輩と話そう」を開催している。高校教員が執筆し、大学教員が監修する形で、「保育概論」と「幼児教育論」で使用する高校生向け「子ども学テキスト（仮称）」の作成が進行中である。進学コースでは、大学授業体験とリフレクション学習を連動させる取り組みが活発化している。では生徒達は、大学とのかかわりにおいて実際にどのような学びを経験しているのか。インタビューや追跡調査を重ねることで、効果を検証することが必要である。この点もまた、今後の課題とする。

注

（１）文部科学省教育課程課・幼児教育課編　『別冊初等教育資料』２月号臨時増刊（通巻950号）　東洋館出版社　2017年２月　p.122.

（２）　中教審答申では、次のように注記されている（同上）。

三つの方針（三つのポリシー）とは、①各大学、学

部・学科等の教育理念に基づき、どのような力を身に付けた者に卒業を認定し、学位を授与するのかを定める基本的な方針（卒業認定・学位授与の方針、ディプロマ・ポリシー）、②ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施し、学修成果をどのように評価するのかを定める基本的な方針（教育課程編成・実施の方針、カリキュラム・ポリシー）、③各大学、学部・学科等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、どのように入学者を受け入れるかを定める基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体性・多様性・協働性）を示すもの（入学者受入れの方針、アドミッション・ポリシー）のことである。

（３）（１）と同じ　p.19.

（４）三浦泰子・川上泰彦　「高大接続改革をめぐる研究動向レビュー－大学での選抜と学び、高校での指導と進路意識を中心に－」　『兵庫教育大学学校教育学研究』第30巻　兵庫教育大学　2017年11月　p.201.

（５）助川晃洋・坂本徳雄　「『社会に開かれた教育課程』の概念と実践－学習指導要領の基底－」　『教育学論叢』第35号　国士舘大学教育学会　2018年２月　pp.109-120.参照

参考文献

朝比奈なを　『高大接続の“現実”“学力の交差点”からのメッセージ』　学事出版　2010年

天野郁夫　『増補　試験の社会史　近代日本の試験・教育・社会』　平凡社　2007年

荒井克弘・橋本昭彦編　『高校と大学の接続　入試選抜から教育接続へ』　玉川大学出版部　2005年

金子元久　『大学の教育力－何を教え、学ぶか』　筑摩書房　2007年
児美川孝一郎　「高大接続と大学入学者選抜のリアル」　『現代思想』第42巻第６号　青土社　2014年４月　pp.71-79.
佐々木隆生　『大学入試の終焉　高大接続テストによる再生』　北海道大学出版会　2012年
主体的学び研究所編　『主体的学び　別冊（特集：高大接続改革）』　東信堂　2017年３月
大膳司　「高大接続に関する研究の展開」　『大学論集』第36集　広島大学高等教育研究開発センター　2006年３月　pp.127-148.
大膳司　「高大接続に関する研究の展開－2006年から2013年まで－」　『大学論集』第46集　広島大学高等教育研究開発センター　2014年９月　pp.31-53.
東北大学高等教育開発推進センター編　『高大接続関係のパラダイム転換と再構築』　東北大学出版会　2011年
東北大学高度教養教育・学生支援機構編　『高大接続改革にどう向き合うか』　東北大学出版会　2016年
冨田知世・喜多下悠貴・日下田岳史　「探究学習が生徒の進路選択に与える影響－Ｘ高校卒業生の認識に着目して－」　『日本高校教育学会年報』第21巻　日本高校教育学会　2014年７月　pp.26-35.
冨田知世・須藤康介・佐藤昭宏　「高校時の学習行動と大学での学業適応の関連－教科学習と探究学習への取り組みに着目して－」　『大学評価研究』第13号　大学基準協会大学評価・研究部　2014年８月　pp.123-134.
中村高康編　『大学への進学　選抜と接続』　玉川大学出版部　2010年
日本高等教育学会編　『高大接続の現在』　玉川大学出版部　2011年
伯井美徳・大杉住子　『2020年度大学入試改革！新テストのすべてがわかる本』　教育開発研究所　2017年

濱中淳子　「高大接続改革と教育現場の断層－『善意』の帰結を問う－」　『教育学研究』第83巻第４号　日本教育学会　2016年12月　pp.411-422.
濱中淳子・山村滋・鈴木規夫　「＜大学適応観＞の構造－高大接続対策の効果を探る－」　『大学入試研究ジャーナル』No.19　大学入試センター　2009年３月　pp.115-120.
溝上慎一責任編集　京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾編　『高大接続の本質　「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』　学事出版　2018年
山内太地・本間正人　『高大接続改革－変わる入試と教育システム』　筑摩書房　2016年
山村滋　「スクール・サーティフィケートにおける中等教育『修了』の意味－スクール・サーティフィケート成立時までに限定して－」　『京都大学教育学部紀要』第34号　京都大学教育学部　1988年３月　pp.231-242.

これらに加えて、『IDE　現代の高等教育』（IDE大学協会）、『教育と医学』（慶應義塾大学出版会）、『月刊高校教育』（学事出版）等の雑誌に所収されている論文を参照した。